

名建築でにぎわいを

戦後日本を代表する建築家の1人として知られる菊竹清訓さん（1928～2011年）が設計した館林市の旧庁舎（現市民センター）で23日、「メタボリズム建築とまちなか再生」と題したパネルディスカッションが開かれた。文化庁職員や大学教授ら5人が、旧庁舎を核としたまちづくりのアイデアを出し合った。



旧庁舎の模型を前に利活用について話し合う登壇者

ている。パネルディスカッションには、旧庁舎1階でテナント運営を手がける東毛建築リサーチ研究所（同市）代表の丸山達也さん、工学院大建築学部教授の大内田史郎さんや文化庁職員ら5人が登壇した。イベントは同研究所、同大の大内田研究室（東京都）、同市の3者が主催した。

旧庁舎は、近代建築の記録調査などに取り組む国際組織「DOCOMO MO」（ドコモ）「日本支部が2023年に「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の一つに選定。県内では他に、県立近代美術館（高崎市）や群馬音楽センター（同）などが選定されている。（細井啓二）

菊竹さんは、国の重要文化財に指定された「スカイハウス」や「江戸東京博物館」などの設計を手がけた。社会変化に対応するため、都市と共に成長できる

よう増改築を想定した「メタボリズム建築」

旧庁舎は1963年に完成。庁舎移転後の

の先駆者として、故黒川紀章さんらと昭和の

82年からは、公民館や

教育利用できる市民セ

ンターとして運用され

ていた。

ていた。

ていた。

ていた。